

「地理歴史防長唱歌」



* 一般郷土史料B379「地理歴史防長唱歌第2集」

解説

明治30～40年代、「地理唱歌」「地理歴史唱歌」と銘打った唱歌が全国各地で作られました。

「汽笛一声新橋を」ではじまる鉄道唱歌もその一つで、いずれも親しみやすいメロディーにのせて各地の地理や歴史が歌いこまれています。

これらの多くは、時とともに忘れ去られましたが、なかには長野県の「信濃の国」のように、現在も県民歌として歌いつがれているものもあります。

山口県でも、1901（明治34）年に『地理歴史防長唱歌』第1集が、2年後に第2集が作られました。郡ごとの地理や歴史が、紀行文のようなスタイルで、あたかも県内を旅しているかのような臨場感をもって歌われています。各郡10番前後の歌詞があり、一番長い吉敷郡では33番まであります。これらの歌詞からは、当時の人たちが自分たちの郷土をどのように理解していたのかが読み取れます。

第3集も刊行され全県が完結する予定だったようですが、第3集については残念ながらその存否は不明です。

* 第七吉敷郡

- | | |
|---|---|
| 一 郡界なる鯖山を
下れば小鯖の禅昌寺
昔は西国の高野とて
今もその名ぞいと高き | 三 大内氏の氏寺と
栄えしかども名にも似ず
衰へ果てゝ本堂の
跡は山口農学校 |
| 二 音にきこえて鳴瀧の
泰雲寺にもたち寄りて
くれば氷上の橋近き
山手に見ゆる興隆寺 | 四 御堀の里の外郎羹
名産なればあがなひて
鰐石見つゝ鰐石橋
渡れば山口町ぞかし |

（以下33番までつづく）